

《2009年9月例会報告》

【日時】2009年9月18日(木) 19:00~21:15 (その後「ルン」。最終組は1:30頃まで)

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】祝! 2019年W杯招致決定!

日本ラグビーの現状 ~高校ラグビー合同チーム問題から見えるもの~

【報告者】嶋崎雅規 (帝京中学高校ラグビー部顧問)

【参加者(会員)12名】朝倉雅史(筑波大学大学院) 阿部博一(日本サッカー史研究会) 牛木素吉郎(ビバ!サッカー) 浦和俊介(楸フォーレックス=ラグビー用品販売) 国島栄市(ビバ!サッカー) 嶋崎雅規(帝京高校) 鈴木崇正(NECデザイン&プロモーション) 高橋義雄(筑波大学) 田中俊也(三日月整形外科) 徳田仁(セリエ) 名方幸彦(文京教育トラスト) 中塚義実(筑波大学附属高校)

【参加者(未会員)2名】★斎藤守弘(日本IBM勤務/東大ラグビー部コーチ/小石川高校ラグビー部OB) ★山本巧(防衛大学)

【ルンからの参加者】井上俊也

【報告書作成者】朝倉雅史

注) ★は初参加のため参加費徴収せず

*****祝! 2019年W杯招致決定!*****

日本ラグビーの現状

~高校ラグビー合同チーム問題から見えるもの!~

嶋崎雅規 (帝京高校)

<目次>

はじめに~テーマ設定の主旨

I. ワールドカップの歴史と日本ラグビー

1. 世界ラグビーの勢力図

2. ラグビーワールドカップ

3. 世界の中の日本

II. 日本ラグビーの現状と課題

1. トップリーグ、大学、高校ラグビーの現状

2. 高校ラグビーが抱える大きな課題ー参加チーム数の激減

3. 東京都高体連の取り組みー10人制ラグビーと合同チーム

4. 「合同チーム改革プロジェクト」ー合同チームから拠点校方式へ

5. 学校運動部活動再考

6. 望ましい運動部活動とは

III. ディスカッション

1. 指導者ライセンスについて

2. 子どもたちとラグビーをめぐる環境

3. 7人制ラグビーの強化に向けて

4. 望ましい運動部活動に向けて

5. 日本代表の強化に向けて

6. 日本ラグビー協会の在り方

はじめに～テーマ設定の主旨

中塚：サロンの月例会は、百何十回もやってるんですけど、ラグビーのことを正面から扱うのははじめてではないかと思います。嶋崎さんは帝京高校では国語を教えておられますが、ラグビー部の先生です。この話がどういう経緯で出てきたのかと言うと、まずラグビーのワールドカップの招致という部分をサロンで取り上げようという話がありました。けど招致活動に直接関わっている方は会員にはおりません。サロンの月例会は会員が話題提供するのが原則ですので、この件を取り上げるのは難しいということになりましたが、ラグビーにどっぷり浸かっている方はおられます。招致活動や 2019 年のワールドカップを取り上げるよりも、まずは日本のラグビー界の現状を取り上げ、問題意識を共有するのが先決ではないかということで、指導現場にありながらさまざまな研究も為されている嶋崎さんに是非ご登壇いただくということで今回に至りました。嶋崎さんとは、全国高等学校体育連盟（以下、高体連）研究部の活性化プロジェクトの中でいろいろ議論しており、明日その会議があるのですが、「高体連とは何をする連盟なのか」ということを考える一つの取っ掛かりとして、ラグビーの合同チームのことを中心に、今年度の研究大会で発表していただくことになっています。そのリハーサルも兼ねてお願いしたという次第です。

嶋崎：帝京高校の嶋崎です。よろしくお願いします。

まずは、なぜこういう話をするようになったのかということですが、私は高校からラグビーを始めました。高校はずっとラグビーをやっていたりして、早稲田大学に行きました。早稲田では「リスの会」というクラブチームに入りました。当時その「リスの会」も部員 50 人ぐらいで、花園（全国高校選手権大会）経験者もいましてかなり強いところでやりました。それから帝京高校の非常勤講師で採用されます。それで、僕が授業の時にラグビーの話ばかりするものだから生徒たちが「ラグビーというのを教えてくれないか」という話になり、86年にラグビー同好会を発足いたしまして、ラグビー指導歴 24 年目になります。

そもそも、こういう研究活動をするようになったのは 2000 年から 2 年間、筑波大学の体育経営学研究室に勉強しに行かせていただきました。そこから、私の場合は特に学校と地域のジュニアスポーツをテーマにして研究活動を続けさせて頂いております。

今日の話の前半は、日本代表とかワールドカップのことについてです。2019 年のワールドカップが日本で開催することが決まりました。これは私にとっては「えらいことだ！！」と思っけていまして。「日本で本当にできるのか？」「無理ではないのか？」と思っけています。そういうところを含めつつ、日本開催を記念しまして、今までの日本のラグビーやワールドカップの歴史を簡単にみていこうと思っけています。

後半は高校ラグビーをテーマにします。高校ラグビー界も少子化の影響を大きく受けて、部員不足でチームが成り立たないという問題が非常に大きくなっけていまして、それを解消するために「合同チーム」を 10 年くらいやっけてきました。そのような中から、問題点や今後どのように発展していったらよいかという話をしたいと思っけています。

I. ワールドカップの歴史と日本ラグビー

1. 世界ラグビーの勢力図

日本というのはいわゆる IRB ランキング（サッカーでいう FIFA ランキング）で、先日トンガに勝ちましたので、トンガを抜きまして 14 位です。おそらく日本史上一番高い位置にいるのではないかと

と思います。No.1は南アフリカ、そしてニュージーランド、オーストラリアと南半球勢がつづきます。それから、アイルランド、フランスとヨーロッパ勢が続くのですけれども、なんと6位にはアルゼンチン。これは意外なんじゃないかなと思います。アルゼンチンが入っています。サッカーと同じ水色と白のユニフォームを“横縞”にしたのがアルゼンチンのナショナルチームのジャージになります。そしてイングランド、ウェールズといわゆるホームユニオンが入ってきまして、フィジー（9位）、スコットランド（10位）、サモア（11位）、イタリア（12位）、カナダ（13位）。ジャパンが14位、トンガが15位。

おそらく、上の三つがずば抜けて強いんですが、ひと括りのファースト・ティア（First tier）として考えていいのは上の8チームだと思います。その下が、セカンド・ティア（Second tier）でだいたい同レベルなんじゃないかなと、そこに大きな溝があるんじゃないかなと思います。ウェールズとフィジーの間、もしくはスコットランドとサモアの間と言ってもいいかもしれませんがその辺に大きな溝があって、上と下では極端に力が違うというのが、今のラグビー界の現状だと思います。

2. ラグビーワールドカップ

ワールドカップというのは4年に一度ラグビー世界一を決定する大会で、第1回大会は1987年ニュージーランド、オーストラリアで開催されました。この時は、予選がありませんでした。この時は、当時のKDDがオフィシャル・スポンサーで、“KDDワールドカップ”という形で行われました。優勝したのはニュージーランドです。当時のニュージーランドのキャプテンだったディビッド・カークは、当時、弁護士さんだったんです。そのように、まだラグビーがアマチュアで行われていた時代、これが1987年です。

その後、第1回から第3回までは16カ国、第4回以降は20カ国の参加で行われていまして、前回の第6回大会のワールドカップ予選参加国は84カ国ということです。だいたい世界でラグビーをやっている国にはこれぐらいで、サッカーの半分以下ということになります。ワールドカップの前回大会は2007年フランス大会で、20カ国で南アフリカが優勝しています。優勝国を見ていただくと、第1回大会からニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、オーストラリア、イングランド、南アフリカということで、基本的には南半球の参加国が大抵勝っています。次回大会も開催が、ニュージーランドとオーストラリアと南半球での開催になりますので、恐らく南半球のチームが有利ではないかと思います。次の第9回大会が日本開催ということで、「えらい事だ！」という話になるわけです。

ラグビーワールドカップの歴史


	開催年	開催国	決勝会場	優勝国	参加国数
第1回	1987年	ニュージーランド・オーストラリア	オークランド/イーデン・パーク	ニュージーランド	16
第2回	1991年	イングランド	ロンドン/トゥィッケナム・スタジアム	オーストラリア	16
第3回	1995年	南アフリカ	ヨハネスブルグ/エリス・パーク・スタジアム	南アフリカ	16
第4回	1999年	ウェールズ	カーディフ/ミレニアム・スタジアム	オーストラリア	20
第5回	2003年	オーストラリア	シドニー/スタジアム・オーストラリア	イングランド	20
第6回	2007年	フランス	パリ/スタッド・ド・フランス	南アフリカ	20
第7回	2011年	ニュージーランド・オーストラリア	オークランド/イーデン・パーク		
第8回	2015年	イングランド			
第9回	2019年	日本			

ラグビーワールドカップはですね、日本ではあまり話題になりませんが規模は大きいんですね。前回の2007年フランス大会では、220万枚のチケット・セールスでした。平均観客数は47,000人。試合は世界238局で放送されて、約40億人の人々がテレビを通じてこの大会を見ました。大会収益は200億円以上と言われます。実は、IRBはこのワールドカップを4年に一度やることによって維持

されているという現状です。いまや、オリンピック、FIFA ワールドカップに続く世界で3番目のスポーツイベントになっています。そういう感覚は多分、日本の人々にはないと思います。この前のJWC（ジュニアワールドチャンピオンシップ）も、相当大きな大会なんですね。日本ではあまり認知度が高くないんですけれども、世界的にみると大きな大会です。つまりワールドカップはそれほど大きな大会なんですが、これを日本で開催するのは非常に難しい事なのではないかなと思っています。

これは余談なんですけど、日本でワールドカップはどのように中継されていたのか。第1回大会から95年の南アフリカ大会までは、日本戦の全試合と決勝戦がNHKで“生中継”されていました。99年は日本戦の全試合と決勝戦がNHKで“録画中継”され、あとJ-Sportの方では全試合が“生中継”されました。面白いんですが2003年は、テレビ東京が開局40周年記念と題して日本戦や決勝トーナメントを“録画中継”しました。そして、2007年は日本テレビが放映権を獲得して日本戦4試合と決勝トーナメント3試合を“現地から10分遅れで録画中継”しました。どうしてそうしたかは分からないのですが、そのことによって大きな事件が起こるんですね。

「日本のトライが放送されず！」という事件です。9月26日、私も見ていましたけれどカナダ対日本の試合が放送されたんですが、何と最後の日本の同点トライが放送されなかったんです。それで、日本テレビのホームページに謝罪文が出ました。



日本のトライ放送されず

9月25日深夜 ラグビーW杯 カナダ×日本戦での中継不体裁について

昨夜のラグビー カナダ対日本戦において以下の事態が発生しました。
約10分遅れの録画放送でお送りいたしていましたが、後半のロスタイムが多く、最後のプレイと思われた場面が長いビデオ判定となりそのままVTRで放送を続けると、その後の日本のトライ(10対12)が放送されないという事態となりました。

その後、日本のコンバージョンから生放送に切り替えました。

その直後にトライシーンを再生しようと試みましたがトライシーンを流すことができず、CMとなりました。

最後のCMとの10秒の間に日本の後半のトライを再生し、実況で終えたのですが、視聴者の皆様に対しては失礼な放送となってしまいました。

大変申し訳ありませんでした。

(日本テレビのHPより)

このような事件が起こりまして、我々の中では話題になりました。世の中の人々は深夜のことですから知らなかったと思いますが、大事件が起こっていたんですね。

3. 世界の中の日本

では日本代表の成績です。第1回は予選なしで招待という形で出場しまして、第2回から第6回まではアジア予選を通過して出場しました。日本は第2回でジンバブエに52-8と勝利しましたが、通算成績は1勝1分け18敗です。第6回のカナダ戦の引き分けとジンバブエ戦の1勝以外は全て負けています。特に第3回のニュージーランド戦では145対17という大敗を喫しまして。この145点というのは大会における1試合最多失点記録になっています。この試合ですが、ニュージーランドはレギュラーメンバー以外のメンバーを出したんですね。それで、ニュージーランドの控えメンバーが本気になってしまったんです。彼らはオールブラックスの15人に入れるかどうかという選手なので、少しでも自分をアピールしようと思って本気になってしまったんです。これが当時のニュージーランドと日本の力の差になっています。スライドは今までのワールドカップにおける日本の戦績になっています。惜しい試合はあるんですが、結果的には勝っていないと言うのが“JAPAN”なんです。

日本代表の成績

- 第1回 18－21アメリカ、7－60イングランド、
23－41オーストラリア
第2回 9－47スコットランド、16－32アイルランド、
52－8ジンバブエ
第3回 10－57ウェールズ、28－50アイルランド、
17－145ニュージーランド
第4回 15－64ウェールズ、9－43サモア、
12－33アルゼンチン
第5回 29－51フランス、11－32スコットランド、
13－41フィジー、26－39アメリカ
第6回 3－91オーストラリア、31－35フィジー、
18－72ウェールズ、12－12カナダ

実は、日本代表が世界と競り合った試合が3試合あります。



日本代表 名勝負3番

- 1971.09 .28
イングランド 6-3 日本(於:秩父宮)
- 1983.10 .22
ウェールズ 29-24 日本
(於:カーディフ・アームズパーク)
- 1989.05 .28
日本 28-24 スコットランドXV(於:秩父宮)

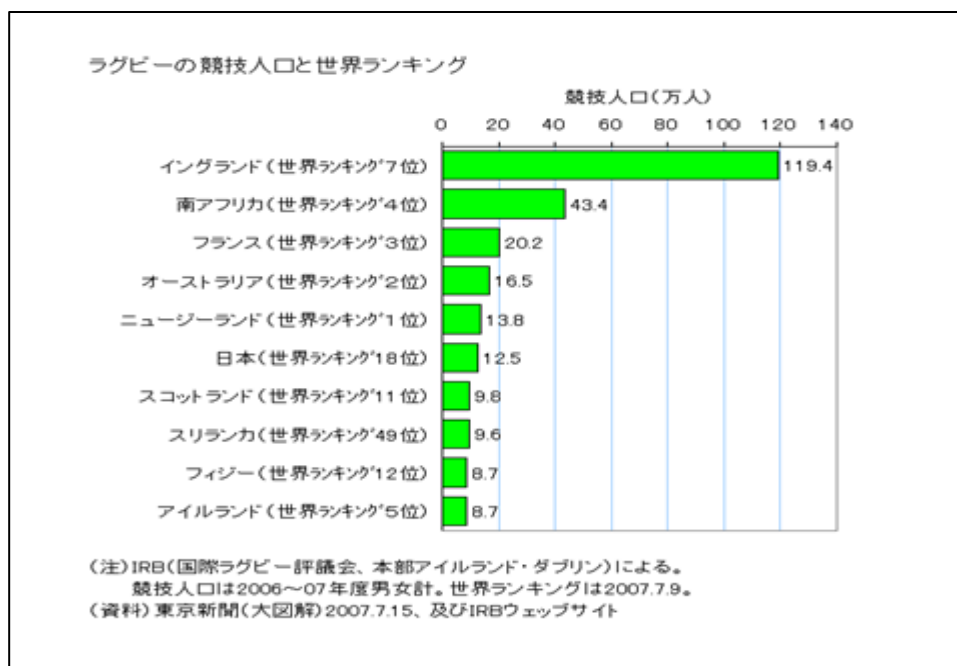
1971年9月28日、秩父宮でイングランドと6対3と、これは伝説の試合です。当時は大西鐵之助先生が監督をしていました。当時の記事がありましたのでスライドに載せます。大西先生は「展開・接近・連続」という理論を立てて日本のラグビーを強くしていこうとされた方です。

それから、1983年10月22日のウェールズと29対24という大接戦を演じました。この時は日比野弘先生が監督をして松尾雄治キャプテンのチームでした。これが読売新聞岩手版にありました。なぜ岩手かと言いますと、当時、有名選手を輩出していた新日鐵釜石のことを特集した40回くらいの連載記事がありまして、その記事の中にウェールズ戦の記事がありました。スライドは「千田、左」という有名なプレーなんですけど、試合中、日本選手はみんな日本語で指示をするんですね。ウェールズの選手は日本語わかりませんから、ずっと日本語でサインを出しながら試合をしていたんです。本当にこの試合は感動する試合でした。

もう一つが、1989年5月28日のスコットランド戦で、28対24で勝利しました。この時のスコットランドはブリティッシュ・ライオンズ（英国とアイルランドの統合チーム）に9人出していましたので、完全なスコットランド代表ではないのですが勝利します。この時は、宿沢監督、平尾キャプテンの時です。詳しい事は『日本の球史 90年が語るラグビー伝説—ひた走る闘魂の物語』という文藝春秋出版の本に出てありますのでご覧ください。

II. 日本ラグビーの現状と課題

1. トップリーグ、大学、高校ラグビーの現状



日本のラグビーの現状についてです。日本のラグビーの競技人口は約12万5千人といわれています。イングランドで120万人、南アフリカ43万人、フランス20万人と、日本の競技人口はけっこう多いんです。比較的、競技人口が多いのが日本のラグビーの現状です。イングランドの人口が突出して多いのは、一時期ナショナルチームの力が落ちた時に協会が底辺としての競技人口を増やす為に努力して、「ユース・ディベロップメント・オフィサー」という若い人たちを協会においたんです。そして、その人たちがラグビーボールを持って全国を回りラグビー普及に努めたという話があります。

阿部：12万5千人という事だけれど、サッカーはどれくらいですか？

中塚：日本サッカー協会の登録人口が90万人くらいですかね。この前、Fリーグが始まる時にフットサルの人口が220万人という言い方をしていましたけど。

日本のラグビーの組織ですけれど、トップリーグというのがあります。三洋電機ワイルドナイツ、NECグリーンロケッツなど社会人リーグなんですが、一応このリーグの中にはプロ契約の選手がいます。三洋、神戸製鋼などはほとんどがプロ契約なのではないかと思えます。サントリーあたりはプロ選手とアマチュア選手(社員)が混在しています。九州電力などは外国人以外、全員社員です。このように、プロフェッショナルの選手とアマチュアの選手が混在しています。Jリーグを目指してトップリーグを立ち上げたんですが、そこまでプロ化は進んでいません。地域密着という点でも、例えばサントリーと東芝が同じ府中市にありますので「府中ダービー」と呼んでやっていますけれども、とはいえ名前に地域名は入っていませんので、やはりJリーグのようにいってないのかなと思えます。

また、トップリーグの下にはトップイーストという下部リーグがありまして、その他に関東社会人リーグ1部、2部、3部、4部という企業チームがあります。しかし、最近は企業が抱えきれなくなっていて、クラブ化しているチームが非常に多いです。そうすると社員以外の人たちが入ることが出来ません。そのようにして企業が抱えられなくなったチームを維持するということが多くなっています。

次に大学生のラグビーです。大学ラグビーは一元化されていません。関東大学対抗戦というのは、いわゆる伝統校である早稲田、慶応、明治を中心としたグループです。それと、関東大学リーグ戦と

いう、関東学院、法政、大東大などというグループに分かれています。対抗戦とリーグ戦の中での入れ替えはありません。対抗戦は A と B の中で入れ替えがあって、例えば青山学院が落ちて立教が上がったりすることがあります。リーグ戦も 1 部から 6 部までありまして、これも激しく入れ替えが行われているわけですが、対抗戦とリーグ戦の間には入れ替えがありません。ですから、関東学院と早稲田が関東のなかで試合をするということは公式戦ではないという仕組みになっています。これを一元化しようという話も出ているようですが、なかなかまとまらないようです。そして、関西リーグ、九州リーグがそれぞれありまして、その他に全国地区対抗というのがあります。これはリーグ戦に入っていないチームです。代表的なチームで言えば武蔵工大や東京学芸大などはリーグに入っていないので、地区対抗ラグビーというところで予選をやって、お正月に名古屋の瑞穂で行われる全国地区対抗に出場するためにチャレンジしているチームもあります。これは地域によって、下部リーグのチームが出てくるところもあれば、別に予選をやっている地域もあります。関東では対抗戦とリーグ戦に出場しているチームに地区対抗の出場権はありません。

参加者：地区対抗には昔、高等商工業や師範学校を母体としている大学が入っているんです。学芸大とか電通大とかが入っていますね。あとはリーグがない地域はそっちになるんですけど。

参加者：全国の大学選手権に出てくる大学の割り振りってというのはどうなっているんですか？

参加者：関東が 10 校、関西が 5 校、九州が 1 校です。それで、関西の 5 位は実は関西代表ではなくて東海、北陸、中四国も含めた代表なんです。

参加者：では、下位トーナメントはやっているんですね。

嶋崎：関東の最下位も北海道、東北と出場決定戦をやって出てくるんですが、ほぼ必ず勝つ構図になっています。

参加者：では、実質的に先ほどおっしゃった数になるということですね。

参加者：そうですね。最終的にはさっき言った数になるんですが、形式的には道は開かれているんですが、地区対抗とリーグではかなり力の差がありますので現実的に勝つのは難しいですね。

もともとリーグ戦というものはラグビーにはなかったんです。ラグビーというのは“対抗戦文化”ですから。例えば早稲田と慶応がやるのは“対抗戦”で、早稲田と明治がやるのも“対抗戦”なんです。例えば、慶応と帝京は同じ対抗戦グループにいても対抗戦を組んでいなかったから試合がなかったんです。そのような対抗戦文化があったのが対抗戦グループなんです。リーグ戦というのはそうではなくて「強いものは強いもの同士でやろう」ということになっています。リーグ戦グループは新興チームなので、簡単に言うと対抗戦には入れてもらえなかったんです。ですから、対抗戦グループに入っているのは、だいたいが伝統校です。

参加者：対抗戦グループのなかでシーズン通して対戦しない大学がありますね。

嶋崎：昔はありましたけれど、今は全部対戦することになっています。

参加者：では、対抗戦と言えども形式はリーグ戦、総当たりと考えていいんですね。

対抗戦のA・BはAの7、8位とBの1、2位が入れ替え戦をすることになっています。これがシビアなんです。入れ替え戦というものの緊迫感。レフェリーは何が一番嫌かということに入れ替え戦なんです。

そして、高校ラグビーです。いよいよ本題に近づいてきました。高体連ラグビー専門部の加盟数は全国で1,165校、27,350人（平成20年度）です。日本の競技人口が125,000人のうち高校ラグビーがこれだけ占めているということです。高校ラグビーというと花園ですね。近鉄花園ラグビー場で行われる選手権大会で、毎年12月27日～1月7日にかけて行われ、今年度で89回を迎えます。出場校は各都道府県から1校、北海道2校、東京2校、大阪3校の合わせて51校が出場します。北海道は広いから、東京と大阪は加盟校数が多いから、そして大阪が3校なのは開催権だから1枠多いという事になっています。実は参加校数が2校しかない県もあるんですね。例えば島根県が2校、佐賀県が4校、高知県も15人いる学校が2校しかないんです。強い学校は、主に関西と九州です。昨年度の優勝校は大阪の啓光学園、準優勝が奈良の御所工業、3位が東福岡と京都成章というように関西、九州が圧倒的に強い。というのは、やはりジュニアのラグビーの違いですね。東京は中学生のラグビーはほとんどありません。関西はやっぱり大阪と京都を中心に中学生のラグビーが非常に盛んです。それと、九州は福岡、長崎でスクールが非常に盛んで小さい頃から皆ラグビーをやっているんですね。

出場回数が多い学校、高校ラグビー有名校はですね。北見北斗とか盛岡工業、久我山、日川、西陵、報徳学園、新田、佐賀工業、大分舞鶴などがよく名前を聞く学校かなと思います。昨年の東京代表は國学院久我山と東京高校でした。

—第88回全国高校ラグビーの決勝戦・準決勝戦を視聴—

参加者：高校生の試合で肩パッドは自由ですか？ヘッドギアは絶対に必要？

嶋崎：ヘッドギアとマウスガードは義務です。

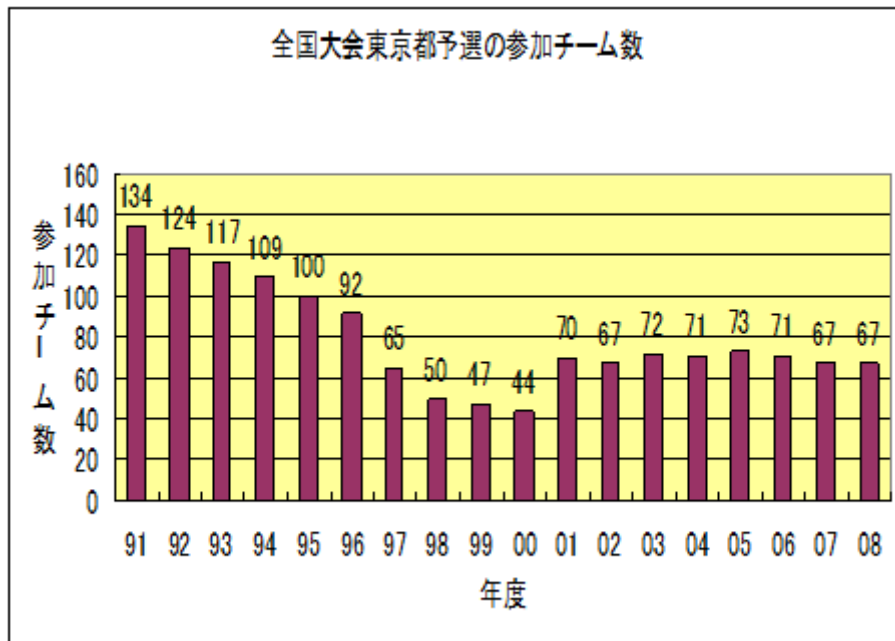
参加者：大学生はいらない？

嶋崎：ヘッドギアはいらないですね。

私、毎年選手を連れて天理で合宿をさせてもらって帰りに花園を見て帰ってくるということをやっているんですが、行くとやっぱり雰囲気は独特のものなので是非、訪れていただけるとおもしろいんじゃないかなと思います。

2. 高校ラグビーが抱える大きな課題—参加チーム数の激減

ということで、段々と本題に近づいていきます。こちらは全国大会東京都予選の参加チーム数です。91年には134チームあったんですね。これがどんどん減りまして2000年には44チームに減りました。ここで高体連が「これはまずいだらう」「44校で2校出したらまずいだらう」という事になりまして、次の年70チームになります。ここには、からくりがあるんですね。「合同チーム」の参加を認めるわけです。15人に満たなくても、他のチームと組んで合同で大会に出てよいということを確認しまして、出場校が70“チーム”に増えるわけですね。しかし、みるみる減っていくこの減り方はすごいですね。134チームが44チームですから、3分の1になってしまうんですね。



参加者：91年より前はどうかだったんですか？

嶋崎：だいたい、こんなもんです。134チームあたりがピークで、少しずつ増えていました。私が高校生の時、80年ぐらいなんですけど、参加校数は100チームぐらいでした。それから少し増えるんですね。「スクールウォーズ効果」などいろいろありまして、“スクールウォーズ時代”が高校ラグビーが一番部員数が多いんですね。

阿部：ちょっといいですか？参加チーム数の所で母数となる学校数はどれぐらいですか？

嶋崎：400に満たないぐらいですかね。

中塚：サッカーが330～340出場していますから、それ以上ということで350～400の間ぐらいじゃないですかね。

阿部：その10分の1（2000年度）になってしまったということですね。

高橋：野球が東西で130ぐらいずつありますから、だいたい野球の半分ぐらいじゃないですかね。

中塚：サッカーは330ぐらい出ますね。東京で。

山本：95年（ワールドカップ、ニュージーランド戦）に145点取られた影響があるんじゃないですか？「ラグビーって弱いじゃん！」というのと、あとはその後報道されなくなったと思うので。

参加者：Jリーグが出来たというの。

山本：そうですね。Jリーグに取られたというの。昔は早明戦とか一週間前から取材されていたけれど、最近はNHKが少しやるぐらいで。

高校ラグビーそのものも東京地区では放送されていないんですね。決勝戦は放送されますけど、TBSが放送からおりましたので。関西ローカルでMBSが若干、放送はしていますが。あとは、J SPORTSが全試合を中継していますが。まあ、TBSが放送から降りるときも、いろいろありました。事情は住友グループなんですね。住友グループが一社持ちでスポンサーをやっていたんですが、住友が「割に合わない」ということで降りた時に、TBSが「住友に降りられたら、もう放送は出来ない」ということで、その前にアンケートなどを行いました。私たちも協力したんです。TBSとしてはなんとか放送を続けたくて住友の顔色をうかがっていたので、頑張ったんですが、結局放送されなくなりました。

その辺りから、東京地区はラグビー人口が減っていると思います。

3. 東京都高体連の取り組み—10人制ラグビーと合同チーム



東京都高校ラグビーの事例

- 1995年度から
10人制大会を実施
- 1999年度から
10人制大会に合同チーム参加
- 2001年度から
全国大会予選にも合同チーム参加
- 2007年度から
10人制大会を廃止
全大会に合同チームの参加を認める

東京都では参加校数の減少に対してどのような策を講じたかということ、まずは95年（参加校数100チーム）ですが、この時から15人に満たないチームは別大会として10人制大会を実施するようになります。このルールは、フォワードが5人、バックスが5人の10人です。これもいろいろあったんです。7人制にしようとか。やはり、15人制につなげるためにはスクラムを組まなければならないと。スクラムを組むためには最低フロントロー3人とロック2人の5人は必要だろうということで、5人でスクラムを組み、残りの5人はバックスという形で、これをやっていたら15人制につながるだろうという考えで“東京ローカル”のルールを創りました。ほかのルールは15人制と全く同じです。

さらに、99年になると10人にも足りないというチームが出てきてしまいます。そこで、10人制大会の方に合同チームの参加を認めるようになります。一方、15人制大会は関東大会、全国大会という上位の大会につながってしまっていて、その上位の大会が合同を認めていませんので10人制大会のみで合同チームの参加を認めました。

しかし、10人制大会のほうで色々と弊害が生まれてくるんです。それは何かというと、10人制ラグビーに特化して強化を図るということで、15人制に出場する努力をしないチームが出てきました。高体連としては15人制に戻るために、廃部になると15人制に戻れないので部を潰さないために10人でも出られる大会をつくって、なんとかモチベーションを保って15人に戻してほしいという事でやっていました。高体連には15人へのこだわりがあったわけです。

「10人なら勝てるぞ」というチームが出てきて、それはそれでいいじゃないかという話もあるんですけども、高体連ラグビー専門部はそうではなかったんです。そういうことで、10人制大会は2007

年で廃止になってしまうんです。そのかわり、高体連は 2001 年度から全国大会予選のみ合同チームの参加を認めていたんですが、それを 2007 年からは全ての大会で合同チームの参加を認めるという変更をします。ここが一つのポイントかなと思います。10 人制大会というものをやって、そこに参加するチームの中では盛り上がっていたわけです。でも「それではいけないのではないか」ということになるわけです。

高橋：10 人制というのは世界的にはやられているんですか？

嶋崎：10 人制はありますね。コブラテンズとかあるんですが、東京でやっている 10 人制大会は全くの“東京ローカル”のルールで、それは要するに 15 人制と出来るだけ同じようにやろうということなんです。

高橋：7 人制にしようという判断は無かったんですか？

嶋崎：7 人制ラグビーになってしまうと、15 人制と 7 人制ではほぼ違うスポーツと考えていいのではないかと。

高橋：では、7 人という判断はなかったと。

嶋崎：はい。でも、県によっては、群馬県とかはですね、7 人制をやっているんですね。各都道府県によって考えは違うと思うんですけども。東京では 7 人制はどうかなという案が出た時に「あれは 15 人制にはならないからダメだ」というような、最初からそのような考えでした。ただ、これからはオリンピック競技になる可能性が濃厚になりましたので、7 人制単独で強化ということでおそらく盛んになってくると思います。フォワード 3 人、バックス 4 人でやるんですけども、フィールドは同じグラウンド使いますから、コンタクトは極めて少なくなるんですね。スクラムはいらないですし、ラック・モールなんていう技術はいらないわけですよ。基本的には、ハンドリング・スキルとランニング・スキルということで、コンタクトはありますけれど、スクラムやラックというものは必要ではなくなりますので、それだけやっても 15 人制ラグビーにはならないと。そこで 10 人いればなんとなく 15 人制に近いものになるのではということなんです。

山本：7 人制というのはいつどこから始まったんですか？10 人制の前には存在しなかったんですか？

嶋崎：7 人制というのは世界的にあったと思います。ワールドカップもありますし。

参加者：7 人制というのはちょっと違いますね。

参加者：7 人制はずっと前からありますね。

嶋崎：それは 15 人から分かれたというより、もう 7 人制の世界大会などもありますから。ただ日本では 7 人制の競技を専門にやってる選手はいなくて、だいたい強豪チームの選手が春先のシーズン頭に大会に合わせて 7 人制チームを作って出るということがあります。ですが、7 人制を競技としてやっているという選手は日本には従来いなかった。最近は 7 人制日本代表っていうのをつくっていますから、そこで特化して強化されている人もいますので

すよね。

山本：まだ特化はしていません。大学でレギュラーではない選手を7人制代表の候補にするということもありますので、これから特化はしていくと思います。

嶋崎：7人制は7分—1分—7分でやりますので、一日にたくさん試合が出来ますし。それから1チームが何回試合をしてもいけるわけです。きついですよこれは。

参加者：フィールドは同じですから、フットサルをフルコートでやるようなもんですね。

嶋崎：オリンピックで採用される理由は、一日で試合が終わるわけですよ。トーナメントやれば。ですから競技日程的に非常に楽。15人制でやるとしたら、中一日でやると言っても無謀な話なので、ものすごく長期間にわたって大会をしないと出来ない。ワールドカップは2ヶ月ぐらいやっていますから。そういうことはオリンピックでは予算の関係で不可能でしょうから、選手の数も7人制だったら12人連れて行けばいいわけですから。15人制ですと25人から30人は連れて行かないとダメです。

山本：15人制とは全く違うと言っても、IRBとしてはやはりラグビーをワールドスポーツにするためにオリンピック種目に、ということをやっていたんですよ。

嶋崎：そうですね。要するに、ラグビーがオリンピックに採用されるためにはどちらが採用されやすいか発想で申請をしたと思います。

参加者：では、15人制は戦略としてはなかったということですか？

嶋崎：オリンピックに関しては、最初からまったくありませんでした。

参加者：初期のオリンピックにはラグビーが入っていましたので。あとは、対抗戦文化に（オリンピックが）そぐわないという事もあってオリンピック競技種目から外れたというのがありますけど。

嶋崎：そもそもワールドカップも1987年までなぜ行われてないかという、ラグビーというのは対抗戦文化ですから、国と国とが第三国で試合をするというのはあり得なかったんです。日本とスコットランドがやるためには日本でやるか、スコットランドでやるか。それをニュージーランドでやるということはありませんでした。それをワールドカップという形で一堂に会してやるようになったと。そこまではホーム&アウェイでやる以外はなかったんです。

参加者：7人制の全国大会はあるんですか？

嶋崎：ないですね。

参加者：オリンピックで採用されたら、国体とかで7人制が入ってきて全国大会でというのは？

嶋崎：今後、考えられると思います。

これが、高体連ラグビー専門部で出している合同チーム編成による大会参加までの経緯です。

合同チーム編成による大会参加までの経緯

ラグビー専門部は今日まで、学校体育、スポーツ振興と競技力の向上に努めてまいりましたが、平成6年頃より、少子化や生徒の運動部離れ等に伴い、大会参加校数が加盟校数を大きく下回ることが顕著になり始めました。そこで競技人口の減少に歯止めをかけることを目的として、10人制大会を導入する事によって、部員不足ながらも日々活動しているチームの大会出場機会を保障すると共に平成11年度からは、10人制への参加も不可能なチームは、合同チームによる大会参加を認めることとなりました。

(東京都高体連ラグビー専門部「平成21年度総会資料」より)

そして、合同チーム編成に関しては以下のような規定があります。

合同チームに関する規定

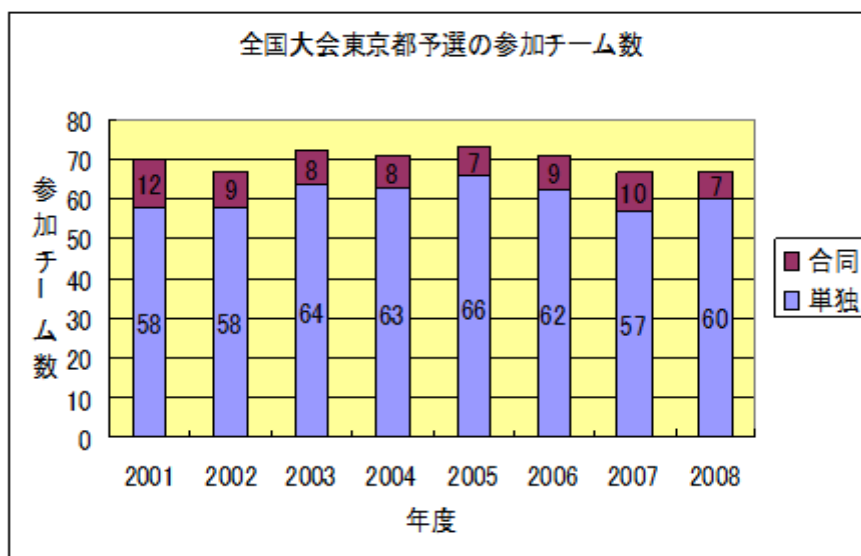
- 合同チーム編成希望校は通常の「参加申込書」、及び「合同チーム編成の承諾書」を使って申請する。
- 合同チーム編成校の選定は専門部(競技委員会)扱いとする。
- 編成チーム同士の練習を積んでから試合への参加をする事。
- その他は今までの加盟校規則に準ずる。

(東京都高体連ラグビー専門部「平成21年度総会資料」より)

特に、「合同チーム編成校の選定は専門部(競技委員会)扱いとする」とありますが、これは要するに、必ずしも希望がかなうわけではないということです。普段一緒に練習をしているからといって「この学校とやりたい」といってもできない場合があるということです。あとは「編成チーム同士の練習を積んでから試合への参加をする事」となっています。例えば、都立小石川高校は都立北園高校と都立向丘高校と合同チームを組んで、練習をして大会に出場しています。ですから、大会にエントリーするのがものすごい早くなるんですね。9月からやる大会のエントリーが6月なんです。7月には発表してあげて、「練習してきてね」「出来れば合宿もやってね」「そして9月の大会に出てね」というスタンスになっています。それから、できるだけ1年間は組み合わせを変えないようにという事でやってきています。

参加チーム数に対する合同チームの割合ですけれども、2001年は70チーム中12チームが合同チームです。以後だいたい70チームの中の10チーム弱ぐらいが合同チームとして参加して、60チームぐらいが単独チームとして参加しています。例年これぐらいの割合が変わっていません。変わっていないということは我々、高体連ラグビー専門部のもくろみが外れたということですね。当初は、単独

が増えて合同が減ると思っていたんですが甘かったですね。



次に、全国で全国高校ラグビー予選に参加した合同チームの数とそれを構成する学校数です。2000年には13チーム出ていますが、2000年は大阪だけです。2001年からは東京や他の県でも始めまして38チームが参加。それから色々なところでやるようになって、2007年が最も多く244校が84チームに分かれて全国大会予選に出ています。全国大会予選に出ている学校数は1000チームぐらいあると思いますので10%弱ぐらいが合同チームで出ています。学校数はだいたい3校で1チームぐらいです。特に多いのが東京と大阪で、なんと2007年に大阪では60校が19チームに分かれて出ており、去年も55校が17チームに分かれて出ています。東京では2007年に30校が10チームに分かれて出ました。このように都市部で合同チームが非常に活かされているというのが顕著な傾向です。もちろん、学校数が多いというのがありますが、交通の便も良いので移動がしやすいのと、近くに学校があるというのがあります。地方の人に合同チームの話をしてピンとこないのは、「そんな近くに学校がない」と言われるんですね。合同チームというのは都市部でしか通用しない解決の論理なんですね。

実は最近、KOBELCOカップといってですね、神戸製鋼がスポンサーについて合同チームのラグビー全国大会を開催しています。全国9ブロックの選抜チームによる全国大会が、最初、北海道の夕張で町の再生や町おこしとして行われていました。ですが、今は菅平で行われています。それは夕張まで行く経費がかかりすぎるというところです。経費は全て選手持ちなので、負担になってしまいますので2007年までは夕張で行われ、翌年からは菅平で行われています。

おもしろいのが、全国高校ラグビー選手権の決勝戦の前座として「U18合同チーム東西対抗戦」というのをやります。要するに、合同チームで全国大会予選に参加したチームから選手をピックアップして、もっと言ってしまえばKOBELCOカップに参加したチームの中から優秀な選手を東西でピックアップして集めて、東西対抗を前座でやるということを行います。東京からは日大二高と修徳高校の選手が出場しています。どちらも東京では強豪チームだったんですが、そういうチームももはや15人は揃わないのでこういう大会に出るようになっていきます。

このように合同チームというのは、高校ラグビー界ではメジャーなもの、一般的なものになってきています。ですが、「それはどうなんだ？」ということでここから話していきたいと思います。これは2000年から筑波大学大学院に行きまして修士論文を書いた時に、合同チームをテーマとして書かせていただきました（体育・スポーツ経営学研究という雑誌に論文掲載）。その時の調査で実際にやっている人に話を聞きますと合同チームの問題はいろいろあります。以下がその問題点です。

- ① 移動に時間や費用がかかり、帰宅時間も遅くなる。
- ② 学校行事等の関係により、合同練習の日程調整が難しく、十分な練習時間や練習回数が確保で

きない。

③ 部員間のコミュニケーションがうまく取れない。

これ比較的強いチームと全くの素人ばかりいるようなチームが一緒になってしまうと、ラグビーという競技に対する認識が全く違ってしまって、チームにならない。「おまえら、もっとまじめに練習しろよ！」みたいなことが起こることがあります。あるいは生徒の気質があまりにも違ってしまってうまくいかないという事が起こります。

④ 運営組織が確立していないので、組織的・継続的活動にならない。

当然、合同チームの運営組織はありませんから、顧問の先生同士の話し合いでどうやって練習していくか考えていくわけですが、あくまでも場当たりの活動にしかならないんですね。

⑤ チームを編成するときにポジションの調整が難しい。

同じポジションの生徒が両チームにいて、出られなくなる生徒が出てきたり、あるいは人数はいるんですが、うまくフォワード、バックスなどのポジションのバランスがとれないことがあります。いまは、高体連ラグビー専門部が、合同チームを編成する時にポジションを全て調査して、できるだけかぶらないように、またフォワードが足りない、バックスが足りないということのないようにしています。

⑥ 試合に出場できない生徒が増えてしまう。

2チーム合わせて25人ぐらいになってしまうと、10人ぐらい出られない生徒が出てきてしまう。そして、かえって補欠を増やしてしまう。これは、中塚先生もやっておられるDUOリーグの方向性に反するところでもあり、問題ではないかということが多々挙げられてきています。

他にも多々事例があるんですけども、今日は割愛させていただきます。詳しくお知りになりたい方は私までお問い合わせください。

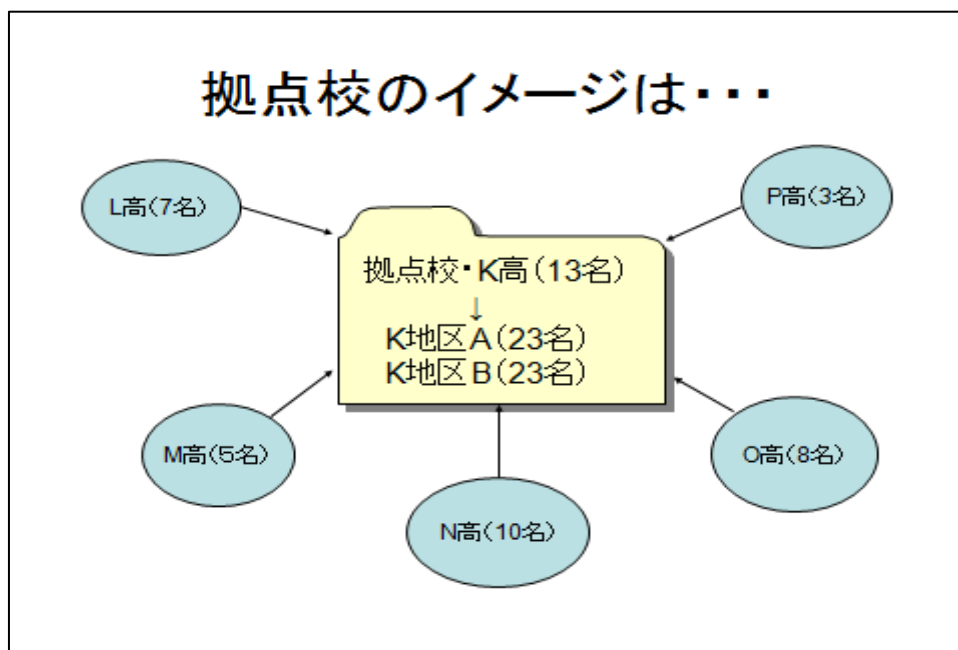
4. 「合同チーム改革プロジェクト」—合同チームから拠点校方式へ

ということで、このまま合同チームをやっているのかなということ、一昨年、東京都高体連ラグビー専門部で、私を中心として一部の委員の人たちで「合同チーム改革プロジェクト」を立ち上げました。その時にやったことをこれからお話しします。

合同チームでやってないで、都内で「拠点校」を5校ぐらいつくってやりましょうと。例えば、都立小石川高校はグラウンドもあるし、ラグビーの伝統校だから、15人いないけれど小石川高校を拠点校として、近隣の、ラグビー部が成立しない学校の生徒たちが放課後集まってきて、そこでチームを作ろうということです。そこには40人、50人集まってきてもいいだろうということで、その中でA、B、Cチームをつくる。50人集まったら、3チームぐらいできますので、そのチームで大会に出たらどうかという案です。

要するに、拠点校に集まった生徒で一つの「クラブ」と考えて、そこからチームを編成し、「小石川ラグビークラブ」の中からA、B、Cチームを出します。そこには向丘高校の生徒も、北園高校の生徒も、駒込学園の生徒もいていいと思うんです。近隣の生徒たちが皆そこへ集まって、練習は週末とか長期休暇を中心に出来るだけ拠点校に集まってやる。さらに、有資格のコーチを置いて、中心となって指導してもらいましょうと。そうすれば、ラグビーの指導の質も上がります。15人で練習しても質の高い練習は出来ないんです。やっぱりラグビーでも30~40人いて相手をつけた質の高い練習が出来るので、練習の質も上がりますのでラグビーの底辺のレベルアップには良いのではないかと思います。ということでこのような提案をしていきました。

イメージとしては以下ようになります。



拠点校に集まってほしい 46 人ぐらいになった A と B という 2 つのチームを K 地区 A、K 地区 B として大会に出たらどうかということを考えました。

大会の参加方法としまして、関東大会予選では合同チームの参加を認められていませんので、同時並行で合同チームだけの大会を実施してはどうかということもありました。例えば、各拠点校で地区選抜、つまり生徒が集まった地区の中で一番よい生徒だけを集めて地区選抜チームを作り、地区対抗戦を総当たりでやって、その他のチームは交流戦を行えばいいのではないかとということもありました。そして、地区対抗で勝ったチームを合同チームの全国大会の代表で出そうとか、その大会からピックアップして全国大会に出すという話もしました。

しかし、結論から申し上げますと、この案は 3 つの理由で却下されました。

理由の一つは、「拠点校になる学校の負担が大きすぎる」から難しいのではないかと。そのため、補完的な役割をする学校を設ける必要性がありました。これはもっともな議論だったんですが、これは拠点校ばかりではなくて近隣の学校でも時に練習すれば解決できる問題なんです。

次に「有資格者のコーチを常時確保できるか」という点です。これは「学校にコーチの資格を持っている人がいないでしょ？」という話です。ラグビー協会から派遣できないだろうかということも議論したんですが、依頼するに至らないまま終わりました。

それから、これがいつも出るものです。「いい選手だけを集めて強いチームを作るのはいかなものか」という、なぜか高体連で話すとこの意見が一番強くなるんですね、最後には。

5. 学校運動部活動再考

ともあれ、これを機会に私たち高体連ラグビー専門部は「部活動」の事をもっと考えようということになりました。今まで、各指導者個人の考えに任されてきた「運動部活動の在り方」や「ラグビーの普及」といったものを組織的・継続的に見直す良い機会ではないかということになりました。運動部活動というにはとても閉鎖的で、顧問の先生や監督さんの号令一下全てありということになるわけです。私のクラブでも、自分は民主的にやっているつもりですが、それでも私が「右！」と言ってしまえばそれで議論が終わってしまうということがありまして、非常に閉鎖的です。

それから、顧問の異動で部が存続しなくなったり、部の運営形態がごろっと変わってしまったり、伝統的な学校、例えば戸山高校という伝統的な学校があったんですけども、そういった学校の部がなくなってしまうわけです。顧問の先生や校長先生の異動が原因です。そういったことは部活動が組織的な活動になっていない、個人営業になっているからそういう事が起こってしまうんですね。

それから、拠点校になったらその学校のイメージアップにつながるのではないかと思います。例えば葛西工業は昔からラグビーが盛んで、グラウンドにはラグビーポールが立って、週末になるといつも近隣のラグビー部の高校生たちが集まって一緒に練習したり試合したりしているわけです。でも、葛西工業の生徒はたぶん 15 人いるかないかです。ただ葛西工業というと、近隣の人たちからすると「ラグビーが盛んで、日曜日はいつも活気があって良い学校じゃないか」というような感じになるんです。葛西でラグビーやってる先生方はそういうことを思って、葛西でラグビーを一生懸命やられているわけですね。

それから、運動部活動と地域の活動ですね。この棲み分けは、いまあまりうまくいってないように思うんですね。部活と地域が断絶してしまっているがために、ある学校にはその学校のサッカー部に入らないで、プロチームのユースチームにっている生徒もいるわけです。そういうのもありだと思わんですが、そういう生徒も巻き込んでできないかということを考えていきました。そうことで「拠点校」は良い案ではないかと思って私たちはやってきました。

ところが、運動部活動にも限界があります。その一つとして、現状では、すべての活動に対して顧問の引率が必要です。そこで私たちが考えたのが、各生徒の所属校の校長が、有資格者のコーチに任せる旨の協定書を取り交わすことはできないかということです。これで、引率なしでできるようにしようとしたんですね。でも、これは東京都高体連としてはダメでした。ところが大阪は、連携協定書というものがあって、A 高と B 高という学校が合同チームを組んだ場合に校長同士が連携協定書というのを交わして、生徒が学校間を自由に行き来して活動してよいという協定書を交わすんですね。ですから、全くできないということはないと思うんですけれども難しいんですね。

いまは、ラグビー部が存在し、高体連ラグビー専門部に加盟している学校の生徒のみが参加できるんです。ラグビー部がない学校、ラグビー専門部に加盟していない学校の生徒は、他の学校に行ってもラグビーをさせてもらえないんです。こういうのを拾えないかなという事があります。ただ、高体連の活動としてやっている以上、このような生徒は拾えないんです。

そこで、そもそも部活動とは何なのということになります。これは 1997 年に当時の文部省から出された保健体育審議会答申です。

そもそも学校運動部活動とは、

運動部活動は、学校教育活動の一環として行われ、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい豊かな学校生活を経験する活動である。この運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るだけでなく、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成するとともに、仲間や教師(顧問)との密接な触れ合いの場として大きな意義を有するものである。

文部省(1997)「生涯にわたる健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」
(保健体育審議会答申)

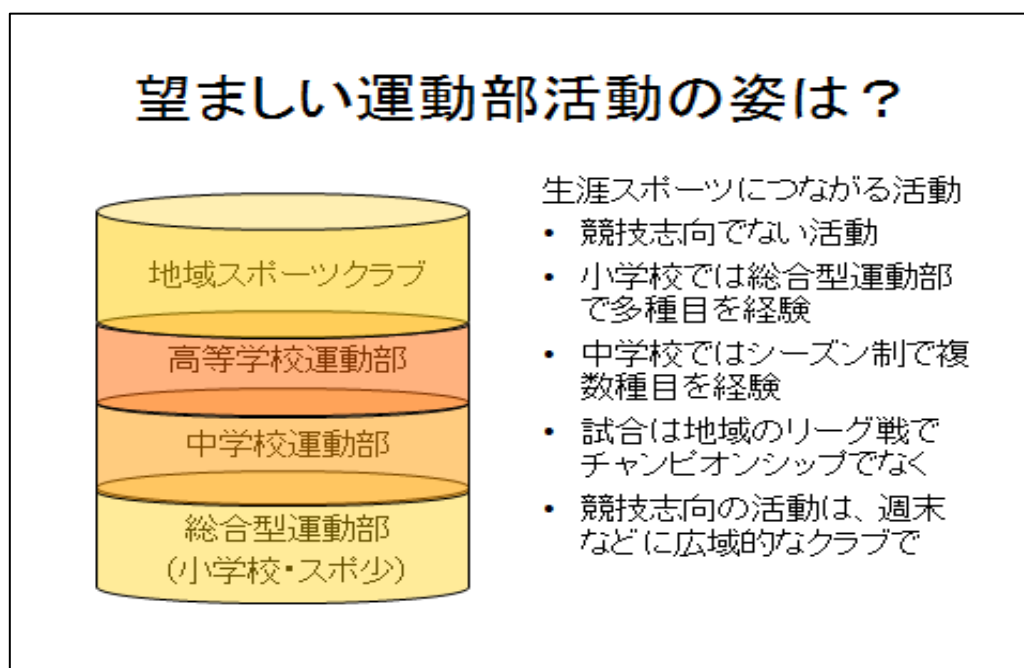
これが、ある意味で部活動の定義的なものになっているわけです。ですから、「生徒が自発的・自主的に活動を組織する」とか、「仲間や教師との密接な触れ合いの場になる」ということは文部省としての運動活動の一つの要素になっているわけです。そうすると「拠点校の活動は部活動なのだろうか？」と言うと、そもそも学校を離れていますから、学校教育活動の一環とは言えないのではないかと。それから「学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開する」のではなく、仕

掛けをして、その仕掛けに生徒がのっかってくるという形ですから、ちょっと違うんじゃないかと。さらに、「学校の仲間」や「学校の先生」との触れ合いではなく、ラグビーをする仲間やラグビーを教えてくれる先生との触れ合いにな、単一学校内の触れ合いということにはなりませんね。

そうすると、拠点校での活動は学校運動部活動とは言えないんじゃないだろうか、これは地域のスポーツクラブの活動とどこが違うんだという指摘が出てくるわけです。まさに、そうだと思うんです。これはもう学校運動部活動とは言えないんじゃないのかなというように思うんですね。ですから、学校の運動部活動がどこまで請け負って、地域のスポーツ活動がどこまで請け負っていくのかというようなことを今後、高体連という組織は考えていかなければいけない。それからラグビー協会もジュニアの強化や普及という観点から、どのくらいの部分を競技団体として引き受けていかなければいけないのか。現状では高校生の普及・強化というのは、ほぼ全て学校そして高体連が担っています。学校にラグビー部がないような生徒であっても、もしかしたらラグビーが大好きであったり、ラグビー選手として素質が抜群にある生徒だったら、そういう生徒をどうやってすくい上げていくのかというのは、競技団体の使命だと思います。学校運動部活動というのも、少子化でこれだけ規模が小さくなってきますと、野球部・サッカー部・ラグビー部・バスケット部・バレー部・テニス部・水泳部・陸上部・・・全てを“百貨店方式”でお店を開くのは無理なんですね。生徒がそれだけいないし、それを受け持つだけの教員もいないんですよ。だから文京区の中学校は、サッカー部のある学校は一枚しかないと聞いていますけれども、割と文京区はバスケットボール部とかバレー部という体育館の種目に集中していくわけですよ。マンパワーの関係でそのようにせざるを得ないわけです。

ですから、学校運動部活動が今までのような総合的に色々な競技を展開する事が出来なくなった時に、どうしていかなければいけないのかということを考えていくべきだと思います。

6. 望ましい運動部活動とは



そこで私の私見なのですが、望ましい運動部活動を考えてみました。運動部活動とは基本的に競技志向ではない活動だろうと思います。強化というのは、もう部活動では出来ないというのが前提です。それを前提として、まず小学校では総合型運動部で多種目を経験する。私のいた小学校が実は2クラスしかなくて、男子スポーツクラブというクラブだったんです。それで夏は野球をやって、冬はサッカーやったんです。それは2クラスしかなかったのと、皆がスポーツをやるわけではなかったのと、先生もそんなにいなかったからなのですが、こんなふうに、男子スポーツクラブ、女子スポーツクラブというのもいいのではないかと思います。

中学校はシーズン制で複数種目をやるべきだと思います。春夏シーズンは例えば野球をやって、秋冬シーズンはバスケットをやるような形態にしていくべきだと思うんです。

そして高校になったら、一つの競技に特化していいと思うんですが、それはチャンピオンシップではなく、地域のリーグ戦（Duo リーグや T リーグ）として毎週、試合と練習が交互にやってくるようなシステムのものが良いのではないかと思います。

また、競技志向の活動は週末に地域のクラブあるいは競技団体が主催するようなもの、あるいは民間のクラブなどでさらに詰めていく形が良いのではないかというふうに私は思います。

以上が私の発表です。ご清聴ありがとうございました。

Ⅲ. ディスカッション

中塚：サロンではサッカーの話題が中心で、他種目の方々の苦勞が目に入ってこなかったんですが、こういうことはサッカーにも起きてくるでしょうし、中学・高校生が、従来の学校運動部の枠組みの中では好きなスポーツができないという事が多々起きています。

これもあまり知られていない話なんです、高等学校体育連盟という組織は、競技団体の集まりである「専門部」と、もう一つ研究組織としての「研究部」があります。専門部の大きな大会としてインターハイが行われ、研究部の大きな大会として全国研究大会が行われています。こちらは全然知られていません。僕は、ひょんなことからそこに関わるようになって、いま、その改革に取り組んでいます。本年度（2010年1月）の研究大会から、高体連全体に関わる大きな課題を取り上げた「課題研究」というのを始めることにして、その最初の発表者として、嶋崎さんのこの報告をしてもらうことになっています。高体連としても、従来の部活動から次の一歩をどう踏み出すかを模索しているというところなんです。

では残り 20 分ぐらいですが、自由に意見をどうぞ。

1. 指導者ライセンスについて

阿部：議論に入る前に質問をいくつか。さっきから出ていた有資格者のコーチというのはサッカーのようにライセンスがあるんですか？

嶋崎：同じだと思いますね。これは山本さんの方が詳しいと思いますので。

山本：ちょっと説明させていただきます。日本ラグビー協会では4つのライセンスがあります。全てに共通するものとして「スタートコーチ」というものがあります。それが入り口にありまして、それから自分の指導するエリアによってコーチ資格を上積みしていきます。主に普及・育成を行うのが「育成コーチ」、国体などで監督をするのが「強化コーチ」、それからトップリーグの監督をするのが「トップチームコーチ」というように3つのエリアによって分かれています。それは体協（日本体育協会）の資格とも連動してしまっていて「育成コーチ」「強化コーチ」につきましては体協の「スポーツ指導者」、それから「コーチ」と連動している形になっています。ですから、他の競技団体は縦型になっていますが、ラグビーは入り口で共通のラグビーの理念と初歩的な安全対策とプログラムを組み立てるという指導要領みたいなものを作成するところまで押さえて、それから指導エリアによって資格を分けるということになります。

牛木：高校ラグビーの監督さんたちは皆資格を持っているわけですか？

嶋崎：僕はスタートコーチです。なかなか、これは順番待ちが厳しくて行かせてもらえないんです。

コーチの研修に。僕はレフェリーをやっていたもので「レフェリーやってるからいいだろう」ということで行かせてもらえませんでした。ずっと。

山本：今おっしゃる通りで、サッカー協会と明らかに違って、プロフェッショナル組織じゃないんですね。ラグビー協会というのは。なので、年間に1回しか強化コーチの研修ができません。それがほしい年間50名です。今、本当に希望頂いてる方、待って頂いてる方たくさんいます。

参加者 A：50名というのは、新たにされる方が50名？

山本：はい。

参加者 A：トータルでは何人ぐらいですか？

山本：今、その資格者数でいうと1,900人です。「育成コーチ」と「強化コーチ」が1,900人で、育成コーチ1,100人、強化コーチ800人ぐらいです。「スタートコーチ」の数字ですと8,000人いきます。トップリーグに関わる「トップリーグコーチ」というのが60人です。

嶋崎：基本的に「スタートコーチ」の資格は持ってないとラグビー部の顧問にもなれないですね。逆にラグビー部の顧問になったら、それは取らなければいけない。

中塚：スタートコーチの資格は何日ぐらいで取れるの？

嶋崎：講義と実技で丸一日です。

2. 子どもたちとラグビーをめぐる環境

阿部：東京にはラグビースクールが少ないと言っていたんだけども。

嶋崎：少なくはないですね。

高橋：トップを持ってないってことですよね。成人までいるようなクラブではないってことですよ。子どもたちしかいない。

浦和：子どもたちとお父さんクラブとかはあるんだけど、間のクラブは少ないですね。

参加者 A：東京のスクールは中学生も？

嶋崎：少ないですね。中学生になるとみんな部活に入っちゃうわけですよ。要はみんな（スクールは）週末だけの活動なので。そうすると中学生はほとんどいないというように空洞化しているんですね。中学はラグビー部あればいいんですが、なかったら皆サッカー部に入ったり、陸上部に入ったりしちゃって、小学生の時にラグビースクールでラグビーやってた子が、中学で他競技に流れて高校でなかなか吸い上げられないというのが、東京では大きな問題になっています。

阿部：早稲田の東伏見でやってるのは小学校ぐらい？

参加者 B：早稲田クラブはまだ小学校なんじゃないですか。ただ、上がっていけば中学はつくと思うんですけど。ただ高校生で早稲田クラブの高校部門があったとしても高体連の試合に出られないので。

高橋：クラブユースはないんですか？

参加者 B：クラブユースは、高校のクラブは2つか3つぐらいしかまだ。神戸の SCIX と曼荼羅？

嶋崎：いや、三鷹オールカマーズにありますけど、結局、クラブはないです。

山本：歴史的な経緯で言いますと、クラブというよりラグビースクールという言葉で入っています。ラグビーの場合、小学校のところは、小学校のラグビーがなかったものですから、ラグビーは高校から始めるものというところから入ってきて、それで、高校は課外活動でやるという形でやっていました。それに対して大阪は中学の先生方にもラグビーやってる方がいて、中学校のラグビー。東京の場合には中学校のラグビー部がいくつかあったんですけども、数が少ない。九州の場合には、一番初めがラグビースクールという形で小学生版はつくっています。たまたま九州の場合にはそれだけでは終わらないようにということで、福岡、長崎の場合は中学校までそのラグビースクールの枠を拡大してきました。それがベースだと思うんですね。大阪が強いのは中学校の中で強いということです。東京はそこが空洞化ですね。

嶋崎：はい。もともとですね、学習指導要領にラグビーがないんですよ。ですから、授業でラグビーは行われなかったということもありまして、ただ、大阪の場合はそれを乗り越えてラグビーをつけたわけですね。東京も中学生のラグビー部は今、増えつつあります。私立は皆持っていて、あとは公立を含めて 30~40 だと思えます。

参加者 C：僕は、20 年前大学生ぐらいだった時に大学の授業でサッカーやったんですよ。で、九州の奴らは手使っちゃうんですよ。「授業でやったことない」と。ラグビーはいつもやってた。それでセンタリングと言うとぶち当たってくるんですよ。危なくてしょうがない。やっぱり小倉高校とか大分舞鶴、あの辺では当たり前のようにラグビーやってるから。

嶋崎：高校では東京でも、久我山高校とかはラグビーやってます。

参加者 C：だから、九州って言うのはやっぱりそういう風土っていうのが強いんだなあって思ったんですけどね。

参加者 D：体育の先生がラグビー出身だったら、サッカーの時間にラグビーやっちゃう。実際、東京でも、球技の時間に、タッチしたらタックルと同じになるラグビー（タッチラグビー）をやっているところもありますね。

嶋崎：公立の中学校のラグビー部は先生が異動すると、こっちが潰れてこっちにまた新しくできるという形で、増えないですよ。全然。先生の数と部の数がイコールなんですよ。

参加者 E：昔、サッカーもそうだったよ。一つの視点で、なぜ減ったかということなんですけど、私は子どもが高校でラグビーをやった関係で、父母の集まりにも出ていました。そこでは圧倒的に、お母さんがラグビー大反対なんです。ラグビー部に入ったらすぐやめてくれと。なおか

つ、いま「楽しくやる」って言うじゃないですか。楽しくやるって仲間作りなわけですよ。僕はずーっと子どもの時から父親に連れていかれて見てましたから、「何でもっと（本格的に）やらないの？」と思うけど、先生の方は「いやいや、楽しくやりましょう」って言う。それで、そこにいる齋藤さんのようなOBが「なんでやらないんだ！」って言えない雰囲気ができちゃったわけ。そこを何とか変えていかないと、“草食系男子”ばかりになってしまう。大学を卒業した社会人を見ていても、圧倒的に女性が強いんですね。なぜかって言ったら、お母さんが男の子を抱え込んじゃって、危ない事はさせたくないっていうのがずっとつながってるんです。だから僕は逆に、子どもの時からラグビーのような、対人でぶつかるようなものをやればいいと思っています。だから、母親に対して、男の子をもっと強くするためにはサッカーとかラグビーみたいなのをやるべきだというアプローチを高体連でしてくれるとありがたいです。

嶋崎：ある高校に赴任した先生が、女子にタグ（タッチ）ラグビーをさせるんです。結構、女の子も楽しんでやるわけですよ。それで、先生が最後に言うセリフが「おまえたち。子どもができたなら、ラグビーさせろよ」。まず女の子からだよと言う人もいます。やっぱりラグビーと言えば3K（サンケー）。「きつい、きたない、けがする」ということで非常に敬遠されるというのは間違いないでしょう。特にお母さん。ですから、親をどう説得するかというところですね。話題がここからそれちゃうんですけど、僕が受け持つラグビー部が50人いるというのは、色々な努力がありました。まず、親を納得させるためには勉強の面倒を見る。僕が面倒を見ます。そして進路を確保する。進学もさせます。進学実績が良くなった途端に部員の数が増えました。親は結局そこで見えますよね。ラグビーをやっているでも大学いけるのならいいや、と。僕がよく他の高校の先生たちに言うのは、「勉強させろ。進学実績よくなったら、特に進学校は親がラグビー部に入れ、と言うようになるから」と。私が勤めている学校は、クラス担任の先生が「ラグビー部行け」と言ってくれています。僕らは親に進学実績を全部親に見せますから。

中塚：嶋崎さんと話をしているいいなあと思ったのが、夏休みの部活です。ものすごく早い時間にやるんですよね？

嶋崎：僕は7時～10時ですね。

中塚：それで、涼しい時間にトレーニングをして、しかも、そこから先に時間がたっぷりできてそこから予備校に行く事もできる。勉強する時間をしっかり確保することができるわけですよ。

3. 7人制ラグビーの強化に向けて

参加者 F：質問なんですけど、オリンピックで7人制が採用されますよね。どんどん大会を重ねていくと、いまスクールに入っている小学生が「7人でやりたい」と言ったり、「なんで高校の高体連で7人制ないの？」っていう時代がもう3、4年先に来ると思うんですけど？

嶋崎：来ると思います。高体連も対応するようになると思います。ラグビー協会そのものがまずその方向に。

山本：はい。まず来年の4月からガラッと変わると思います。7人制をメインに持ってくると思います。オリンピックになるって言ったら、全部7人制で拾ってくると思います。

参加者 F：磐田のジュビロが地域密着で結構やってて、あの子たちそろそろ中学校に入りはじめて、

受け皿さえジュビロがつくれれば7人制のチームぐらいは十分作れる可能性があると思うんです。女の子はやめちゃうかもしれませんけど。そうすると7人制っていうのはすごい未来があります。15人制がフルコートのサッカーだとすると、7人制はフットサルにでき方が似てるなと思うんですよ。追い風が吹いてるんじゃないですか？ 7人制でジュニア時代やってた子が、15人になって、2019年には日本代表になるっていう流れ？

山本：それは狙ってると思います。

参加者 F：そう。そこで高体連がぶれて変な大会とかやっちゃうと、強化の面でも普及の面でもちょっと苦しいかなと？

山本：国体も7人制にする可能性がかなり強いですね。そこはいま、高体連と話はしてると思います。

嶋崎：そうですね。はい。

牛木：そうすると、15人制は喰われちゃうと？

山本：15人制をいつからやるかという問題になってくると思いますね。年齢的な問題を含めて。そのところは、はっきりと言えないと思いますけど。まさに、今ここで議論していただいた方がいいと思うんですけども。フットサルと11人制の関係とか。

参加者 F：似ていて（7人制は）しかも正式種目になっちゃいますからね。すごいPRですよ。

山本：そうですね。日本の持って行き方としてはそっちで持って行って、どう（15人制に）つなげるか。そういうところを。

参加者：7人制でやってきた子の中からピックアップして15人に持っていくかもしれないし。

山本：それも出る可能性もあると思いますし。そこは、はっきり指針は決まっていなくても、7人制をいま、逃す手はないということになっているので。フットサルとサッカーの関係をどう見ていくかというのも事実なんです。

浦和：似てると思ったんですけど、7人制に他競技から来る人、陸上とかバスケットとか。そういう身体能力の高い選手を7人制に特化して強化していくのもありなんじゃないかなと？

参加者 H：サッカーも結構行くんじゃない？

山本：タレント発掘プログラムって有りますよね。あそこをやっぱり狙いますよね。

阿部：すると2019年問題が出てきますね。オリンピックとかも。

山本：例えば陸上であればいま、中学生、高校生で100mを10秒5で陸上では通用しないですよ。ラグビーだったらエースですよ。そういう方をいっぱい探すとかそういうことになってくるんじゃないですか。そこを組織立ててやろうとしているところですね今。

4. 望ましい運動部活動に向けて

阿部：最後の小学校、中学校というので、学校経営とかそういうのはやっぱり、「高校野球で食ってる」という学校もあるので。

嶋崎：それは一部ですから。

牛木：嶋崎さんの案は僕、非常に面白いと思ったんだけど。アメリカのように高校、大学と全部シーズン制にしてはダメなんですか？ アメリカではみんな、一つのスポーツのシーズンが4ヶ月ずつじゃないですか。なんで中学だけしか（シーズン制を）考えないのかっていうのを聞きたいんですが。

嶋崎：結局、高校になると学校経営戦略上、一年中、野球ばかりやっていたり、サッカーばかりやっている学校が存在するわけじゃないですか。それはそれとして認めていかないと。シーズン制の学校もあっていいと思うんですよ。だけど全部シーズン制にしまうと、そういう学校は困ってしまうんですよ。絶対隠れてやりますよ。

高橋：法的な罰則をつくらなければダメですよ。

嶋崎：そういう学校、つまり一種目に特化してやっている学校をいま否定してしまうのはどうなのかということです。

牛木：中学だったら可能性はあるということですか？

嶋崎：中学校は公立ベースじゃないですか。だから法的な、行政からの力で押し切れると思うんですけど、私立学校は生き残れないです。だから、私立が多数存在する高校にはあまり強く言えないんじゃないかなと。だから中学までというのは、ほぼ公立ベースなので押し切れるだろうというふうに思います。

山本：中高一貫校が出てきて、そういう学校のスポーツの実情っていうのはどうなんですか？ 例えば中3と高1なんかは、一緒にやっても別にいいじゃないかって単純に思いますけど。

参加者 I：確かに切れてます。

山本：意味がないじゃないですか。

参加者 I：おっしゃる通りです。中学校は中学校の行政の縦割りで、高校は高校なんですよ。

山本：例えば、数学の授業を先取りしてやったりという事はできないんですか？

参加者 J：練習は一緒にやらないと成立しないから、一緒にしてますよね。小石川なんかは。

山本：体育のカリキュラムはどうなんですか？

中塚：新しい指導要領はですね。小・中・高が6・3・3じゃなくて、4・4・4の考え方ですね。

だからそう考えると、小中も中高も融合して考えていかないと、本当はダメなんです。方向性としては融合なんです。だけど実際は、中学と高校のところで切れた感じです。

山本：それはなぜですか？

中塚：例えば、私立はそうかも知れませんが、中高一貫校の場合、一人の教員が中学も高校もみるという仕組みだったら、そこはぶち破って行けると思うんです。教科の中身でも学年を先取りして、高校2年生までで高3までの内容を全部終えて、高3の一年間は受験対応なんていうのをやれると思うし、やっているところはたくさんあります。それは完全に中高一貫の場合です。ただ、そこで人事交流をしないような所だと、たぶんそこまでいかないですよ。

嶋崎：うちの学校は、僕は中学生の授業持ってないですけど、全部相乗りですから、一緒に練習もするし、中3は秋の大会が終わった瞬間に高校生と一緒に練習やってます。切れ目なく。

参加者：資格の面があるんじゃないですか？ 中学・高校の教員免許を両方持っていればいけど。

嶋崎：もちろん、うちのような一貫校では、両方持っている人間しか採用しません。片方（中学か高校の教員免許）では採用されません。僕がいた高校は完全一貫の学校だったんで、教科もクラブも全部一緒にやっていました。帝京はラグビー部みたいな普通のクラブと一緒にやっていますけど、野球部やサッカー部みたいな全国から選手が集まるような部は、中学と高校で切れてます。ラグビー部やテニス部は一人の教員が6年間通してみているということをやっているの。公立の中高一貫校はまだ人事交流の面で問題があるんでしょうね。

中塚：それとやっぱり、関わっている競技会が中体連主催、高体連主催という話になってくると、それぞれの上位のレギュレーションに左右されるような事もあるんじゃないかなと思いますね。

嶋崎：ただ、サッカーはU-16で国体やったりしてるんで。

中塚：それはもう中体連、高体連全く関係なし、協会の判断です。だから、嶋崎さんの「望ましい部活動」の提案も、学校で話を進めていくと壁が色々あるような気がするけど、そうじゃなくて、生涯スポーツとか競技団体とか、そっちの話でいけば十分可能性はあると思うんだけど。

参加者：拠点校という話で、拠点校が学校じゃなくて、例えば東芝府中とかトップリーグないしトップイーストのチームがグラウンドを貸して、人も手配して、そういうふうにすると、企業と地域のつながりという面でもメリットがいっぱい出てくると思うんです。先生方も毎回連れて行かなくていいというように。

嶋崎：それでいいと思うんですけど、僕らは一応学校サイドの人間なので、学校の存在意義とかそういうものもありますから。学校というのは地域の公共財ですから。学校は教員のものでも子どものもものじゃなくて地域のものでですから、特に公立学校は。地域の公共財だから地域の人々が使うものだという意識があるので「学校を地域の拠点にする」というのはそういう僕の発想です。それは横河でも東芝でも全然問題はないと思います。ただ、そこで怖いのが、学校から部活動なくしちゃえというのが結構強い意見としてあるんです。「部活動なんか学校でやるな」「余計な事はやるな」「教員は教科だけ教えておけ」「スポーツは外のクラブでやったらいいじゃないか」と。ただ、部活動があるから学校が活性化しているというのもあると思います。僕は、

例えば部活がなかったら、学校まじめに行ったかな、なんて考えるわけですね。たぶんラグビー部に入らなかったら学校まじめに行っていなかっただろうと思うんです。ラグビーの練習があるから行っていたようなもので。いま、僕があずかっている生徒を見ても、そういう生徒がいっぱいいるわけです。だから、「部活をなくしてしまえ」「地域で請け負いますよ」という話は、あっていいと思うんですけど、学校のスポーツもあっていいんですよ。在り方を変えればいいだけで。だから、なくしちゃえという議論が一番怖い。

牛木：ドイツなんかは、去年あたりからは違うらしいけど、ほとんど学校は午前中しかやらないですね。午後からスポーツや他のものはみんな別のクラブに行っていてやっていますから、学校は勉強、スポーツは別っていうところもあっていいんじゃないかな。そういうことも考えられるんじゃないかと。学校がどうあるべきかという問題になってくるので、まあ高体連がどうあるべきかっていう問題とはちょっと違うんだけど。全くそういう考え方を排除してやらなければいけないっていうことはないと思う。学校は勉強っていうのも一つの考え方だと思いますね。

高橋：愛知県の半田はそれがすごい議論になって、休日は部活動を禁止にしたんです。それは総合型地域スポーツクラブを育てる上で、土日まで部活をやられると総合型が育たないんです。だから、平日は部活をするんだけど、土日までスポーツをしたい人は総合型でやってくださいね、ということで切り替えるということをやって両者の顔を立てたんですけど。

5. 日本代表の強化に向けて

山本：じゃあトップリーガーというか、セレクトしたメンバーだけアカデミーみたいな形で拾ってもらおうというのは、強化っていう部分では可能かもしれないですね。学校や拠点校の持っている良さというのを生かしながら、さらに上への強化ということとなると、そこで初めて、先ほどおっしゃったように、企業チームに抱えてもらうというのはありかもしれませんね。

参加者：そうすると、「いい選手だけ青田刈りで抱えてるんじゃないか」っていう話になるのかなって、思うんですよね。

鈴木：そこは一番聞きたかったところなんですけど、全国的な強化・育成制度という点からいうと、例えばサッカーですと、昔から高校選手権があって、一方で日本協会は全国9ブロックでトレセンをやって、地域では交流的なフェスティバルをやって、というふうに至るところで若い才能を見たりピックアップする機会があるんです。日本協会は統一した選手登録制度を持っていますし、そういう仕組みの中から選手が収斂されていってトップレベルに残っていくというイメージがサッカーにはあるんですが、ラグビーでは、ジャパンのトップレベルの選手たちはどういふふうにか才能を見出され、育っていくのでしょうか？

嶋崎：多分、高校日本代表が最初のセレクトだと思うんです。東京では国体のためにオール東京を選抜するんですけど、それにはかなりの人数を集めてセレクションをやるし、スタッフは大会会場に散ってずっと選手をチェックしてオール東京というチームをつくります。その中から優秀な者がU-17とかU-18の日本代表候補としてリストアップされていて、書類選考もあると思いますけど、その中の一部分は菅平に夏に集められて高校日本代表がつけられていくというのが、たぶん最初です。それ以下の年代ではそういうことは全くないというふうに思います。

参加者：最近、割と低年齢化してU-15も見るといふように日本協会はなっていますよね。

山本：はい。U-17のブロックトレセンというのをやって、そこでデータなどを取って、みてるようにしています。ただし今は、嶋崎先生のおっしゃった通りで、そこから先は大学が一番の空洞化で、どこで拾ってるかという、日本代表はトップリーグから拾うというのが大前提です。そのためにトップリーグがあって、そこに顔を出しているものから拾っているということです。その下が、今まではワールドカップがあったU-23、U-21、U-19という世界大会があったんですけど、それらがなくなってU-20に統一されました。高校の時は高体連から選んできたが、大学が空洞化してしまっていて選べないので、今やっているのが「タレントID」というディレクターを一人置いて、彼が高校3年生など大学のトップの試合にまだ出られないレベルの人間をみてあげると。そしてU-20を作っていますね。

鈴木：ハイパフォーマンスマネージャーではなくて？

山本：ハイパフォーマンスマネージャーの下に、タレントIDというのがあります。

嶋崎：この前のU-20の大会に出ていたのも、大学ではレギュラーで出ている選手はほとんどいない。ほとんど大学1年生や2年生ですから、大学のレベルではほとんど出られないです。

山本：サッカーと比べると、ソースが結構限られていると思います。サッカーは高校サッカーもありますし、大学は良くわかりませんが、まあ流通経済大学なんかありますよね。あとはクラブからの二本立てがあると思うんですけど、ラグビーには一本しかありません。

鈴木：先ほどお話にあった、100mを10秒5で走っても陸上選手としてはダメだけど、ラグビー選手としてなら有望だ、という観点で選手を選ぶというお話には興味があります。私は先日、ニュージーランドの会社が開発したデータベースソフトの話を知りました。これはニュージーランドのラグビーの協会が採用しているシステムだそうで、全国の子供たちの運動能力のデータを測定して入力し登録しておく。そして、一芸に秀でた非常に高い運動能力の測定値が出ると、そのソフトがデータベースから拾ってきて、ニュージーランドのラグビー協会の担当者に自動的に知らせる仕組みなんだそうです。ニュージーランドではそんなことをしているのか、と思いました。世界のトップはそういうところからセレクションをやっているんだということを知ると、IT技術をうまく使っているし、かなり先見性があると思うんです。日本協会の方にそういう発想はあるのでしょうか？

山本：あると思います。まさにおっしゃるところで、今まさに手をつけているのはそこで、今まで上がってくる者を取っていたんですけど、それではだめだという事で、これからは取りに行くと。体力測定パッケージを作って専属の人間をフルタイムで雇ってやっていくと。そうするとソフトの問題になって、例えばニュージーランドは保険会社と一体になってデータと全部の怪我の統計を取ってくるんですね。ただ、そういう形で日本では出来ないの、逆にこっちから取りに行こうということになっています。各学校で体力測定していますが、あれのラグビー版を作って全国まわってきて測定会っていうのをやって、それをどんどんデータベース化していこうということでは動いていると思います。

6. 日本ラグビー協会の在り方

嶋崎：まあ今の日本協会に足りないのは組織とマンパワーなんですよ。

山本：組織とプロフェッショナルですね。

嶋崎：そうですね。結局はボランティアですからみんな。

山本：アマチュアの良さもありますけど。アマチュアの限界を知っているのに。

参加者：協会の専従スタッフの方って何人いるんですか？

山本：30です。

高橋：ラグビー協会の仕組みとして、関東・関西・九州ってありますよね。そこと日本協会との連絡や意思疎通っていうのは？

山本：厳しいところですね。

高橋：そこが一番問題ではないかと僕は思うんですね。実はトップリーグ連携機構というところのアドバイザーをやっていますね、日本のトップスポーツの色んなアドバイスをしているんですが、ラグビーで一番引かかるのは、情報の流れが組織の壁で遅くなる。関東協会に入っているクラブに対して、様々な情報提供やコンタクトを取ろうとすると、日本協会と組織が違うので時間がかかる。他の所、例えばサッカー協会いくとどんなレベルでも情報が素早く上がってきて話が早いんですけど、ラグビー協会は段階、段階で文書を出して全てを踏んで行かないと物事が進んで行かない。例えば、トップリーグにいるのは日本協会だけ情報を落とすトップイーストは関東ラグビーフットボール協会の範囲だから手を出せないという話になっちゃうと、情報交換が難しくなってしまう。そういう実感があって比較的遅いんじゃないかなと思います。

嶋崎：今日は高校ラグビーの合同チームや部活の在り方という、皆さんの期待されていた日本代表の強化とかではなかったんですが、私のテリトリーだとどうしてもそういう話ではなくなってしまって、それは山本さんのテリトリーになるんですけども。また、ワールドカップが来ますので、それに向けて動かざるを得ないわけです。多分このままじゃワールドカップできませんから色々動いていくと思いますので、そういうところをまた追っかけていただければと思います。今日はどうもありがとうございました。